

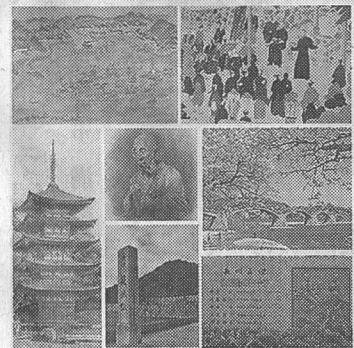
『やまぐちから考える世界史』えにし書房

刊行記念フォーラム&ブックトーク

やまぐちから考える世界史

歩いて、見て、感じる歴史

松野裕子・長濱幸一・大和裕美子・佐田信子 共著 えにし書房



『やまぐちから考える世界史』

昨年五月に発行された『やまぐちから考える世界史』

歩いて、見て、感じる歴史の刊行記念フォーラム&ブックトークが昨年二月二十八日に山口市のKDDI維新ホールで開かれた。本書は、山口県やそこに暮らす人たちが古代から中世、近代、現代にいたるまでの歴史の折にふれて、世界の国や地域とどのようにつながってきたのかを考える一助となるよう、高校生や大学生でもわかりやすいよう構成されている。山口県の高松教師、大学教員、学生、生徒ら約四〇人が、現地を「歩いて、見て、感じる歴史」を学べるよう執筆したものだ。フォーラムでは藤原辰史氏(京都大学人文科学研究所教授)が、「食をめぐる『地域』と『世界』」「食権力」概念から考える」と題して基調講演【既報】。後半のブックトーク『歴史の旅は始まったばかり』では、本書執筆者である安溪遊地(山口県立大学名誉教授)、

地域の歴史から現代を捉える

執筆者によるブックトーク 長生炭鉱の動きに関心高く

に現在進行している長生炭鉱にふれた意見が多かったのも特徴だった。安溪氏は、大学教員時代に学生たちを現地に連れていくフィールドワークをしてきた経験がふまえて、「歴史を知らないといふ騙される。五感を使って学ぶ」ことの大切さを強調した。同氏は「朝鮮通信使との文化交流——漢詩の交換で平和をつくる」と「やまぐちと世界を結ぶ塩の物語」を執筆したことを語った。

なかも中国電力の原発建設地で現在、関西電力が中間貯蔵施設の建設計画をする瀬戸内海に面した上関町の田ノ浦遺跡の歴史にふれた。田ノ浦地域は、「奇跡の海」と呼ばれるほど生物多様性

の豊かな里海で、約六〇〇年前の縄文時代前期から人が住み始めた。弥生時代に、現在の岡山市児島付近で本格的な土器製塩が始まり、この技法が瀬戸内海に拡大。瀬戸内海の製塩土器は瀬戸内海西部から九州北部にかけて広く分布していた。「この地域は石器製造所であり、当時の人が瀬戸内海を縦横に行き来して

類を見ない長生炭鉱追悼碑

大和裕美子氏

追悼碑」を執筆した大和裕美子氏は、「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の活動をテーマに二〇一四年に博士論文を書いたのをもとにして今回、高校生でも分かりやすいように執筆したと語った。長生炭鉱を知ったのは、二〇〇八年に「山口県民の岸信介の岸信介」を観るために修士論文を書くために宇部市

史を読んだことがきっかけだったといひ、山口武信氏(初代会長)に教えを請いながら、二〇一三年に追悼碑が建てられていくその瞬間に立ち会ったことをふり返った。「長生炭鉱の追悼碑は全

て、とくにネット空間で摩擦が起こるなかで、「ある現象が起こったとしたら、なぜ起こったのか、どんな背景があったのかをまず知る。過去の過去は過ぎ去った話だが、むしろ過去が現在をあらわしている。過去のことをどのように今とらえ、かが、現代を生きる私たちの問題だ」と歴史を学ぶ姿勢や問題意識も本書にこめたと紹介した。

発言した男子学生は、長生炭鉱の実情や、そこにある日本の加害者意識に興味を持って高校二年生から活動してきたことを語った。「地域の歴史を学ぶことを通じて、何事も常に再定義し続ける力が身についた。刻む会に携わっておられる人は、多角的な視点を持つて歴史の物語に対して切実にとらえている。韓国遺族から見た正しさ、日本人から見た正しさなど、多様な正しさのなかで、自分がどう考えるか、そこに再定義の過程が生まれるし、だから学ばし、批判的思考が生まれ、自分の存在も考えるのだと思う」と語った。

追悼碑が建てられていくその瞬間に立ち会ったことをふり返った。「長生炭鉱の追悼碑は全

国を見て他でもない。刻む会の働きかけで韓国遺族会ができ、二〇年近くにわたる交流を通じて信頼関係を積み重ねてきた。その長い時間によって追悼碑がつけられた。追悼碑には韓国遺族の理解も得ながら、日本人の名前を刻んでいる。そうした経緯で建立された追悼碑は他に類を見ない」と語った。また日本のアジア植民地の歴史について、とくにネット空間で摩擦が起こるなかで、「ある現象が起こったとしたら、なぜ起こったのか、どんな背景があったのかをまず知る。過去の過去は過ぎ去った話だが、むしろ過去が現在をあらわしている。過去のことをどのように今とらえ、かが、現代を生きる私たちの問題だ」と歴史を学ぶ姿勢や問題意識も本書にこめたと紹介した。

発言した男子学生は、長生炭鉱の実情や、そこにある日本の加害者意識に興味を持って高校二年生から活動してきたことを語った。「地域の歴史を学ぶことを通じて、何事も常に再定義し続ける力が身についた。刻む会に携わっておられる人は、多角的な視点を持つて歴史の物語に対して切実にとらえている。韓国遺族から見た正しさ、日本人から見た正しさなど、多様な正しさのなかで、自分がどう考えるか、そこに再定義の過程が生まれるし、だから学ばし、批判的思考が生まれ、自分の存在も考えるのだと思う」と語った。

最後にマイクを握った「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」代表の井上洋子氏は、「長生炭鉱の歴史を次は教科書に載せたい。それが私たちがめ

追悼碑が建てられていくその瞬間に立ち会ったことをふり返った。「長生炭鉱の追悼碑は全

最後にマイクを握った「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」代表の井上洋子氏は、「長生炭鉱の歴史を次は教科書に載せたい。それが私たちがめ

遺骨の力借り 歴史を動かす

井上洋子氏

最後にマイクを握った

「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」代表の井上洋子氏は、「長生炭鉱の歴史を次は教科書に載せたい。それが私たちがめ

最後にマイクを握った「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」代表の井上洋子氏は、「長生炭鉱の歴史を次は教科書に載せたい。それが私たちがめ



④ブックトークの様子④発言する井上洋子氏(昨年二月)

